

表 乾乳期間が乳量、飼料摂取量、周産期病発生等に及ぼす影響

乾乳期間	試験頭数	日乳量 <sup>(※1)</sup> (kg)	飼料摂取量 <sup>(※1)</sup> (TDN) (kg/日)	体重減少率 <sup>(※2)</sup> (%)	周産期病が重症化した頭数 <sup>(※3)</sup>	受胎日数
40日	3	33.8	14.0	8.8	0	129
60日	3	32.3	11.8	20.8	2	228 <sup>(※4)</sup>

(※1) 分娩後60日間の平均値。  
 (※2) 分娩直後体重を100%とし、90日後の減少率平均値。  
 (※3) 周産期病が発生し、分娩後90日間での体重減少率が20%を超えた頭数。(体重減少率20%以上：周産期病重症化の目安)  
 (※4) 試験頭数3頭のうち、周産期病重症化により1頭廃用となったため、その他2頭の平均値。

## 乳牛、乾乳期間短縮で効果

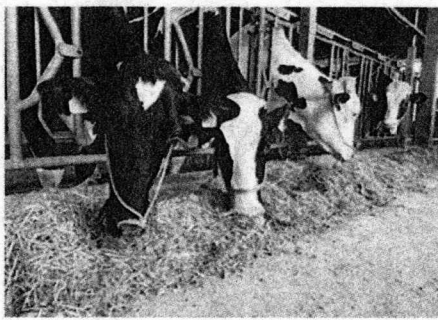
## 生涯の牛乳生産期間長く

酪農経営は飼料や初妊牛の価格高騰により厳しい状況にあり、乳牛の産次数を増やし生涯の牛乳生産期間を長くすることが経営改善に直結する。乳牛の病気は分娩前後に多く(周産期病)、分娩前の搾乳休止期間(乾乳期間)の飼養方法が重症化を左右する。

酪農経営は飼料や初妊牛の価格高騰により厳しい状況にあり、乳牛の産次数を増やし生涯の牛乳生産期間を長くすることが経営改善に直結する。乳牛の病気は分娩前後に多く(周産期病)、分娩前の搾乳休止期間(乾乳期間)の飼養方法が重症化を左右する。

## 現場で使える！研究成果

摂取量の不足状態を緩和する方法であり、周産期病を減らし、乳牛の活躍期間延長が期待される。しかし、その効果は牛の個体差の影響を受けやすいことから、個体差の影響を受けにくい乾乳期間短縮方法を検討した。乾乳期間の短縮は、分娩21日前から増飼せず、蛋白充足率110%とする飼料給与を行い、乾乳期間を40日とした。



飼養中の乳牛

その結果、慣行の60日乾乳(分娩21日前から蛋白充足率130%に増飼)と比較すると、分娩後2カ月間の日平均乳量は低下せず、飼料摂取量(TDN)は増加した。さらに、周産期病発生および体重減少が抑制され、繁殖成績の改善効果が見られた。この成果は牛・酪農経営双方にウィンウィン(相互利益)の効果構築し、健全な牛乳生産に役立てられる。(農林技術開発センター畜産研究部門 堤陽子)